

Title	北東アジアの平和に対するキリスト教の役割
Author(s)	宮本, 悟
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.51, 2012.1 : 111-128
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4213
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

北東アジアの平和に対するキリスト教の役割⁽¹⁾

宮 本 悟

それだから、あなたがたに言うが、神の国はあなたがたから取り上げられて、御国にふさわしい実を結ぶような異邦人に与えられるであろう

マタイによる福音書二二章・四三節

はじめに

北東アジアにおける平和に対する最も大きな不安定要因の一つは、国家の形成 (Nation Building) が終わっていないことであると考えられる。国際社会で一般的に国家承認の基準となつていけるゲオルク・イエリネクの定義によれば、国家とは領土と国民、国家権力という要件によつて成り立っている。すなわち国家とは、一定程度の領土を持ち、そこに所属する人々の集団である国民を持ち、領土と国民を実効支配できる国家権力を持つていることが成立要件である⁽²⁾。しかし、その国家権力たる政府が主張する領土や国民と、実際に政府が実効支配している領域や国民が異なることは意外と多い。

現在でもヨーロッパでその問題が残つているとして知られているのが、北大西洋条約機構（NATO）の軍隊が介入した紛争で知られるコソボである。二〇〇八年二月一七日にコソボ自治州議会はセルビアからの独立宣言を採択し、コソボ共和国の成立を宣言した。しかし、セルビア政府はそれを認めておらず、いまだにコソボ・メトヒヤ自治州としてセルビア国家の一部としている。実際には一九九九年のNATO軍爆撃によるセルビア軍のコソボ撤退以来、セルビア政府はコソボ・メトヒヤ自治州を実効支配していない。約九〇%がアルバニア系で占められるコソボでは、住民の大部分が独立を支持している。しかし、セルビア政府にとっては、コソボはセルビアの領土であり、コソボのアルバニア系住民にとっては、コソボはコソボ共和国の領土である。

セルビア政府の置かれている状況は、大韓民国政府のそれと類似している。セルビア政府はコソボ・メトヒヤ自治州を実効支配していないが、そこがセルビア国家の領土であると主張している。大韓民国政府は軍事境界線以北の朝鮮半島を実効支配していないが、現行憲法第三条でそこを領土と規定している。

このような状況は北東アジアでは大韓民国政府だけではない。北東アジアで実効支配領域と国民を持つ政府は、日本国政府、大韓民国政府、朝鮮民主主義人民共和国政府、中華民国政府、中華人民共和国政府の五つがある。しかし、日本国政府を除く他の政府は、自らが実効支配する領域と、自らが主張する国家の領土が大きく異なっている。国家を近代化の産物と見なすモダニストによれば、ナシヨナリズムによつて領土が祖国とされるのは、常に自身の見直しを続ける国家の行動の結果であり、その行動には国勢調査と地図作成がある。従つて、政府機関による公刊地図を見れば、その政府による国家の領土の認識が分かるのであるが、大韓民国政府公刊の地図には朝鮮半島全土が領土とされており、朝鮮民主主義人民共和国政府公刊の地図にも朝鮮半島全土が領土とされている。中華民国政府や中華人民共和国政府も同様に、双方の公刊地図で台湾と大陸をすべて領土としている。^④その点で見れば、北東アジアで、国境地域で問題が残された部分はあるものの、政府による実効支配領域と国家の領土、国民による国家所属の認識がほぼ一致するのは日

本国政府しかない。

政府による実効支配領域と国家の領土、国民による国家所属の認識が一致していない場合、コソボのような紛争に至る可能性が十分にある。コソボだけではなく、イスラエルとパレスチナ、アフガニスタンなど、国家形成の未完成による紛争は世界の多くの地域で見られるものである。

そのため、北東アジアに平和をもたらすためには、どのような形であれ、北東アジアにおける国家形成を完成させることが必要となるであろう。本稿では、その北東アジアの国家形成においてキリスト教がどのような役割を果たせるのかを朝鮮半島問題を中心に論じてみたい。国家形成の問題は、実際に国家が完成したのかというよりも、実際にどのように国家が認識されているのかという問題である。そこで、本稿では、まず国際社会や国内社会において北東アジアにおける国家形成がどのように認識されているのかを説明した上で、朝鮮半島問題におけるキリスト教の役割について論じてみたい。

1. 北東アジアの国家形成に対する国際社会や国内社会での認識

国際社会では、北東アジアの国家形成はどのように認識されているのであろうか。もちろん、地域によって理解の度合いは異なるであろう。さらに、国家形成が未完成であることが国際社会で問題視されないことも考えられる。なぜなら、国家形成が未完成であるのは北東アジアだけではない。中東や南アジア、アフリカにもそういう所がある。世界的に見れば、国家形成の問題はまだかなりの地域で残されており、北東アジアが特別な地域とは言えない。その意味では、北東アジアで国家形成が未完成であるのは自然でもあつて、国際社会から問題として認識されるかは疑問である。

国際社会における北東アジアの国家形成を理解する一つの指標として、北東アジアの各政府の国連への加盟状況を見てみたい。北東アジアの政府で国連に加盟しているのは、四つである。それは、日本国政府と大韓民国政府、朝鮮民主主義人民共和国政府、中華人民共和国政府である。

中国では、二つの政府のうち、中華人民共和国政府しか加盟していない。原加盟国として国連に加盟した中華民国政府は一九七一年に国連から追放されたが、それは中華人民共和国政府が中国の代表権を持つと国連総会で議決されたためである。国連安全保障理事会常任理事国であった中華民国政府には、一般加盟国として国連に留まる選択肢もあつたが、当時の蒋介石政権は拒否した。中国の二つの政府は、一つの国家で代表権を争う形で国連への加盟を決めていたのである。第三国が、中国の二つの政府と同時に国交正常化することも中華人民共和国政府は認めていない。そのため、国際社会では、中国の国家形成が未完成であることは比較的認識しやすいであろう。

それに対して、朝鮮半島は情勢が異なる。一九七三年五月二三日に大韓民国大統領であった朴正熙が南北朝鮮の国連同時加盟を主張すると、同日、朝鮮民主主義人民共和国の主席であった金日成は統一後における一国加盟を主張したことがあつた。⁽⁶⁾しかし、その南北朝鮮の両政府による論争の結末は、一九九一年九月一七日の南北朝鮮の国連同時加盟によつて終了した。前年に大韓民国と国交正常化を果たしたソ連が、大韓民国の国連加盟に反対しないことが予想されたので、朝鮮民主主義人民共和国は自らの主張を曲げて、国連に加盟申請したのである。もつとも、南北朝鮮政府は、一九六〇年代末から第三国による南北朝鮮との同時国交を容認してきた。南北朝鮮の関係は一九九一年一月一三日に締結された「南北基本合意書」で国家と国家の関係ではないと明記されたが、以前から南北朝鮮政府は国際社会が二つの政府による二つの国家を承認することを容認してきたといえよう。そのため、国際社会からは、朝鮮半島の国家形成が未完成であることは認識しにくいと考えられる。

ただし、いずれにせよ、中国と朝鮮半島の国家形成が未完であることは、アフガニスタンやイスラエルなどの恒常的

に武力衝突が発生する地域に比べれば認知度は低いと考えられる。というのは、国家形成が未完とはいえ、実際に相手側の政府を武力で壊滅させようとするような全面的な戦闘は、一九五三年の朝鮮戦争の停戦以来、北東アジアでは発生していないからである。また、南北朝鮮で散発的にテロ行為や局地的な戦闘があつたが、長期にわたつて継続して発生しているわけではない。ために、域外国においては北東アジアの国家形成が未完であることを認識しにくい状態にあると考えられる。実際に戦闘やテロ行為が続いているなら国際的にも国家形成が未完であると認知しやすいが、北東アジアはそうではない。

また、北東アジアの域内国であつても、政府の実効支配領域と国家の領土、国民の国家への所属認識がほぼ一致する日本国では、北東アジアの国家形成が未完であるとの意識は比較的、希薄である。⁽⁷⁾しかし、北東アジアの現実があまり認識されていないことは、むしろ北東アジアの経済発展にはプラスになつていふと考えられる。一般的に内戦状態の地域に投資するのは高いリスクが伴うため、域外の企業は投資しようとしにくい。しかし、北東アジアには、一部を除いて、世界各国の企業から投資が集まつてきた。それは、日本や域外国で、北東アジアの国家形成が未完であるとの認識が希薄であることも要因の一つであろう。

一九六四年には経済協力開発機構(OECD)に加盟し、一九七五年に先進国首脳会議(G6―現G8)のメンバーになつた日本は、域内の先進国として北東アジアに対する投資の先駆者でもある。もし、北東アジアの国家形成が未完であつて、投資が危険であるとの認識が強ければ、日本の企業は北東アジアへの投資はできなかつたであろう。また、近隣の先進国である日本の企業が投資できないのに、遠方のヨーロッパなどの企業が積極的に投資するとも考えにくい。日本による北東アジアへの投資は、北東アジアへの投資が安全であるという印象を域外国の企業に広めることになつた可能性がある。さらに、北東アジアで実際に大規模な戦闘や継続したテロが比較的少なかつたことは、北東アジアに投資しても安全であるとの認識をさらに国際社会に広めていふと考へられよう。

このように、実際の国家形成では、国内では未完と認識されていても、それが国際的に認められていなければ、経済発展をもたらすことは想定される。さらに、その発展によって社会変動が生まれ、国内で新たな国家認識を構築することも考えられる。最近の中国や朝鮮半島の国民間では、国家認識についてある程度の差が見られる。経済発展を遂げてきた中華民国政府の統治領域（台湾）の国民には、政府の実質的な統治領域は大陸とは別の国家の領土であるという認識が強くなっている。すなわち、台湾は中国（中華民国を含む）とは異なり、自らは中国人ではなく、台湾人であるという認識である。約二〇年間、国民の意識調査をしてきた台北にある政治大学選挙研究センターによると、台湾人であつて、中国人ではないと答える人は、一九九二年には一七・六%であつたのが、二〇一一年には五四・二%にも増えた。一方、台湾人ではなく、中国人であると答える人は、一九九二年には二五・五%であつたのが、二〇一一年には四・一%にまで減少した⁽⁸⁾。さらに、民主化後である一九九三年から中華民国政府は「台湾」名義で国連に対する加盟申請を始めた。この申請は国連で却下され続けているが、これは中国である中華人民共和国政府の存在を否定したものである。中国ではなく、台湾として国連に加盟して、国際社会への参加を目指したものである。中華民国政府の実効支配領域である台湾では、明らかに国家認識の変化が生まれているといえよう。ただし、中華人民共和国政府は、台湾が中国でないという主張を認めたことがない。両政府の間で国家認識の違いが生じ始めていることが分かる。

大韓民国政府の統治領域の国民にも、実質的な政府の統治領域を国家の領土と同一視する認識が強まってきていると考えられる。すなわち、大韓民国は朝鮮民主主義人民共和国と異なる統治領域を持った国家であるとの認識である。それは、大韓民国国民に対する意識調査で南北朝鮮の統一を望まない意見が若い世代になればなるほど多くなっていることから理解できよう⁽⁹⁾。

一方、朝鮮民主主義人民共和国政府の統治領域の国民では南北朝鮮の統一意識で世代間の違いがそれほど大きくないと考えられる。なぜなら、経済発展の度合いが低く、社会変動が少ないために世代間の意識の差が大きくないと考えら

れるからである。実際に、北朝鮮からの亡命者に対する意識調査では、二〇〇〇年であろうと二〇一〇年であろうと調査年に関係なく、また調査団体にかかわらず、大韓民国で生まれ育った人々よりもはるかに統一を望む意見が高く、九〇%を超えている。⁽¹⁰⁾

ただし、朝鮮民主主義人民共和国政府の認識には変化と思われるような点はある。二〇一〇年五月二〇日に南側から発表された天安艦事件の報告書をめぐって、同日に発表された朝鮮民主主義人民共和国国防委員会スポークスマンの声明に「我が主権が行使される領海、領空、領土」という文章が含まれていた。⁽¹¹⁾これは本来であれば、朝鮮半島全体を示す言葉であるが、この声明では朝鮮民主主義人民共和国政府の統治領域を意味している。朝鮮民主主義人民共和国でも国家に対する認識に変化が現れている可能性はある。⁽¹²⁾しかし、現在の所、上記のような僅かな変化しか見られない。

以上のように国際社会ではあまり認識されていない北東アジアの国家形成であるが、それによって経済発展が可能になり、それに伴う社会変動によって、北東アジアの国民に新たな国家認識を与えており、一部を除けば、今なおその認識は変化しつづけるといえよう。次に、朝鮮半島における国家認識の変化にキリスト教がどのような影響を与えられるのかを考察したい。

2. 朝鮮半島問題とキリスト教の役割

従来、世俗化や政教分離を前提とする近代的な国家では宗教の役割は小さいとされてきた。⁽¹³⁾しかし、一九七九年のイラン革命以降、国家における宗教の役割については政治学でも注目され始めた。さらに、いわゆる共産圏における政権が崩壊した一九九〇年以降になると、新旧の諸宗教が復活・展開し、宗教による対立が表面化することが様々な地域で

類発し始めた。中野毅はこれを「宗教復権」と呼び、その特徴を①原理主義（聖典の無謬性と社会に対する宗教的倫理の支配）②神秘主義的宗教運動（神秘的な力や霊性を強調する）③ナシヨナリズムとの結合と整理している。⁽¹⁴⁾この③であるナシヨナリズムと宗教の結合は、国家形成における宗教の役割にも大きな影響を与えるはずである。

マーク・ユルゲンスマイヤーは、ナシヨナリズムと宗教が結合する要因を従来の世俗的ナシヨナリズムへの失望にあると考えた。諸帝国の植民地から生まれた新興諸国のリーダーは、自由で平等な世俗的な国家のビジョンによつて近代国家を形成していき、人々もそれに期待を持っていた。しかし、後にそれは世俗的な西欧による支配の延長線と捉えられ、人々は世俗的ナシヨナリズムに失望する。それに代わつて台頭してきたのが宗教的アイデンティティーに基づく宗教的ナシヨナリズムである。⁽¹⁵⁾

もともと他の思想や哲学と異なつて、偉大な思想家などが存在しないナシヨナリズムが、哲学とかよりも、宗教と強い親和性があることはベネディクト・アンダーソンも論じているところである。⁽¹⁶⁾アントニー・スミスは、デュルケムの議論から、ナシヨナリズムを含むイデオロギーと宗教の中核にあるのは崇拜と信仰であつて、その相違は二次的なものにならず、シンボリズムの問題にすぎないと論じている。⁽¹⁷⁾

では、ナシヨナリズムと宗教にはどのような関係があり得るのか。スミスは、エリ・ケドゥーリーなどナシヨナリズムが近代の産物であると見なすモダニストが考えるナシヨナリズムと宗教の関係については三つのモデルがあると提唱している。

一、「世俗的入れ替え説」……現代社会では、世俗的で革命的なナシヨナリズムが次々と宗教に取つて代わっている。

宗教は伝統的社会的な構成要素であり、伝統的社会的他の特徴と共に消えつつあるもので、近代化に特有の要素であるナシヨナリズムに置き換えられる。

二、「新伝統主義」……たとえ変形し、過激化した形であってもナショナリズムが「宗教」へ回帰する。宗教は、古い時代から近代に受け継がれている多年継続的なものと見られ、ナショナリズムの盟友となつて、それを助ける可能性のあるものと理解される。

三、「千年王国主義的な政治的宗教」……ナショナリズムは、伝統的な宗教に対立しながら、従来の宗教の特徴の多くを受け継いで、それらに不穏な政治的そしてナショナルな新しい意味を付与して使っている⁽¹⁸⁾。

朝鮮民主主義人民共和国では、「世俗的入れ替え説」の概念の下で宗教政策を行ってきたと考えられる。金日成は、一九七一年一月二七日に宗教について「我々が志向する共産主義は科学的な共産主義です……昔の人々は、この世間には搾取と圧迫、妬みや嫉妬、貧しさと悲しみだけあると思い、そのような社会悪をなくし、この地の上に皆が幸せに暮らせる社会を建設できると思いませんでした。そのため、彼らは死んで《天国》や《極楽世界》に行けば楽になれるというキリスト教や仏教の教理に耳を傾けるようになりました。しかし、そのような《天国》や《極楽世界》はどこにもありません。現代科学技術は《天国》や《極楽世界》がないことを現実的に証明しました」と宗教を過去のものとする考えを明らかにした⁽¹⁹⁾。これは金日成が、宗教を伝統的社会的特徴であり、世俗的で革命的なナショナリズムによって取って代わられるものと認識していることの表れであろう。朝鮮民主主義人民共和国の場合における世俗的で革命的なナショナリズムとは、共産主義思想であり、より具体的には社会主義憲法で規定されている主体思想がそれに該当する。

そのため、朝鮮民主主義人民共和国政府が国家形成で推進してきた世俗的で革命的なナショナリズムに対して人々が失望すれば、ユルゲンスマイヤーが論じるように宗教的ナショナリズムが台頭して既存のナショナリズムに取って代わる可能性がある。ただし、その宗教がキリスト教になるとは限らない。朝鮮民主主義人民共和国では、共産主義思想に

キリスト教が取って代われる可能性があるであろうか。

少なくとも、金日成は共産主義思想に対抗するものとして、キリスト教を認識していたと考えられる。その認識が端的に現れるのが、金日成が南北朝鮮の関係を「キリスト教対共産主義思想」として理解していたことである。南側では、南北朝鮮の対立は、「資本主義対社会主義」や「民主主義対全体主義」の構図で語られることが多いが、その南側と北側の認識の違いが現れたエピソードが北側の文献に残されている。北側の文献によると、一九七二年に韓国中央情報部部長であった李厚洛イ、フックを代表とする南側代表団が平壤を訪問した時、北側は社会主義であつて南側は資本主義であると南側代表が発言したという。それに対し、金日成は「北半部人たちが共産主義思想を信奉しようが、マルクス・レーニン主義を信奉しようが、また南朝鮮人たちが〈イエス〉を信じようが、〈神様〉を信じようが」統一を実現しようと言言したという。⁽²⁰⁾南側では南北朝鮮の対立を「資本主義対社会主義」として理解していたが、金日成は「資本主義対社会主義」だけでなく、「キリスト教対共産主義思想」の構図でも認識していたということを示している。

加えて、金日成は、思想と宗教をあまり区別していなかったようである。一九六〇年八月一四日に金日成は「(南朝鮮では)特に共産主義思想はずつと苛酷な弾圧を受けています。キリストを信じるのが自由ならどうして共産主義思想を選択することは自由にならないのですか? 共産主義思想は最も科学的な思想で、最も進歩的な思想です」と語っている。金日成にとつて、キリスト教は宗教であつても、思想である共産主義思想に対抗できる可能性があるものと認識していたといえよう。⁽²¹⁾

しかも、「キリスト教対共産主義思想」の構図は、朝鮮民主主義人民共和国の国家形成にもかかわってくる重要な問題でもある。金日成は、解放直後である一九四七年一月一日には「我ら働き手たちは、キリスト者たちと農民たちに、誰が土地を与えてやったのかをはつきり分からせてやらねばなりません。牧師たちがいくら《神様》を求めても《神様》は畑の一畝もくれたことはないし、ただ人民政権だけが土地を与えることができたのであり、現実的な幸せは

人民委員会〔訳注―当時の政府機関〕を信じて、奉ることによってもたらされるといふ実際的な事実をもって、キリスト者たちと農民たちの目をよく覚ましてやらねばなりません」と語っていた。⁽²²⁾従って、朝鮮民主主義人民共和国では、共産主義思想がキリスト教に取って代わっていくことで国家形成を進めてきた一面があったことが窺える。

そのため、建国当時から朝鮮民主主義人民共和国政府にとつては、キリスト教徒が減つて、共産主義者が増えることが望ましかつたはずである。実際に、北側でキリスト者が激減したのは、北側の主張によると朝鮮戦争の時期である。金日成も、一九六四年二月八日に「我が国では宗教人達も全て改造されました。他の国から指導者達が我々に朝鮮で宗教問題をどうやって解決したのか聞いてくることが多いが、実は解放されてから我が国でも宗教問題を解決すること大変困難な問題の一つでした。その時、宗教が新しく育ってくる世代に悪い影響を与えていたが、かといって宗教を強圧的な方法でなくすことはできませんでした。しかし、祖国解放戦争〔訳注―朝鮮戦争〕過程で我が国では宗教がすべてなくなりました。戦争時期に米帝国主義者達が礼拝堂などを爆撃し、粉々にしてしまい、宗教人達は米帝侵略軍の奴らの蛮行を見て、自ら改造されました」と語っている。⁽²³⁾後に金日成の後継者となる金正日も、一九六六年二月二十七日に芸術映画である「崔鶴新一家」の作成に際して、「宗教問題は祖国解放戦争期に解決されました」と語ったことがあ⁽²⁴⁾る。少なくとも朝鮮民主主義人民共和国では、朝鮮戦争が終わった頃には、すでに共産主義思想がキリスト教に取って代わっていたと考えられよう。

従つて、共産主義思想がキリスト教に代わつて世俗的で革命的なナショナリズムとなつて国家形成を推進してきた朝鮮民主主義人民共和国で、共産主義思想に対する失望が広まれば、排除されてきたキリスト教が台頭して宗教的ナショナリズムを形成する可能性はあると考えられる。もし、その宗教的ナショナリズムによつて南北朝鮮の国民の間で共通の国家認識を持つことができれば、統一の可能性が高まることも考えられる。

朝鮮民主主義人民共和国では徐々にキリスト教に対して寛容になつてきている。もともと朝鮮民主主義人民共和国で

は、建国以来、憲法で信仰の自由は保障されていると規定してきた。実際には朝鮮戦争から長い間、教会は建てられなかったが、一九八八年から再建され始め、現在では二つのプロテスタント教会、一つのカトリック教会、一つのロシア正教会が平壤に建設されている。もちろん、政府や指導層を支持することで許されている範囲でしかないキリスト教であるが、以前に比べれば、キリスト教に対しては寛容になったといえる。それは、すでに宗教人がかなり少なくなつたため問題にならないと認識しているのも一因であろう。金正日は、先述の「崔鶴新一家」の作成に際して、「キリスト教についてですが、それは我が国に一九世紀後半期に米国宣教師たちによつて急速に広がりました。戦争前にその信者が北半部にも数多くいたが、戦争時期に米帝侵略者たちの野獸的爆撃で礼拝堂がすべて破壊され、米帝の殺人蛮行によつて多くの信者たちが犠牲になり、生き残つた信者たちも大同郡のその牧師のように目を覚まし、イエスを信じなくなりました。今、共和国北半部には宗教を信じている人がいくらにもならない上に、信仰の自由が法的に完全に保障されてゐるため宗教問題で少しも問題がありません」と語つた。⁽²⁵⁾

ただし、朝鮮民主主義人民共和国では、キリスト教は西洋（米国）の宗教であるという認識があるようである。金日成は、晩年である一九九三年に「私は解放の後にも宗教人たちを抱きこんで彼らが新しい祖国建設に積極的に参加するようにしました。その時宗教人たちとの事業で重要な問題は、彼らの頭の中に残っている米國崇拜と事大主義を根絶やしにして、民族自主意識を植え付けることでした。それで私は、康良煜カンリョク牧師をはじめとするキリスト者たちにはつては《神様》を信じて西洋の《神様》を信じずに朝鮮の《神様》を信じなさいと語り、仏教人たちにはつては朝鮮の《釈迦》を信じなさいと言いました。私は今も宗教人たちに会えばいつもそのように言つてやります」と語つた。⁽²⁶⁾そのため、現在ではキリスト教の信仰は反民族的なものとして理解されている可能性はある。もし、そうであればキリスト教を基盤とした宗教的ナショナリズムが台頭するには一定の障害になると思われる。

従つて、キリスト教が反民族的ではないと北側に印象づけるために南北交流で南側のキリスト教徒が活躍することが

重要であると考えられる。南北交流においてキリスト教を含む宗教人の訪朝はすでに可能になっており、一九八九年六月から始まった南側の宗教人の訪朝は二〇〇二年一月までで三九七名になる²⁷⁾。それは、朝鮮民主主義人民共和国政府も、南北交流や経済協力のために宗教も活用することを考えていることに一因がある。金日成も、宗教に関心がなくとも、南北交流のために宗教を活用することも考えていた。晩年である一九九三年一月二〇日に金日成は以下のように語っている。

我々が壇君（朝鮮神話での祖神）の陵を改建することは祭祀を執り行なうためではなく、我が人民達に平壤に石墓形式になった古朝鮮建国始祖の墓があることを見せてあげるため壇君陵に祭壇は建設しなくても良いです。しかし南朝鮮人達や海外同胞たちが壇君陵を見に来て祭祀を執り行なうと言うかも知れないので祭石は作っておいた方が良いでしょう。今、南朝鮮に壇君を崇拜する大倭教人（壇君を信仰する教団）が何十万人もいるとのことですが、彼らが壇君陵を見に来ることができません。これから南北往来が実現すれば、大倭教人たちが中東の国々でキリスト者達とムスリム達がエルサレムとメッカに毎年巡礼するように壇君陵を訪ねて来ることができません。今、エルサレムをクドゥス〔訳注―アル・クドゥス（アラビア語）とも呼ぶが、キリスト者たちはエルサレムをイエスが生まれ、十字架で釘を打たれて死んだ聖地としており、イエスの出生年度を基準にして西暦を使っています。南朝鮮にいる大倭教人達は壇君が出生した年度を基準にして檀紀を使っています。今年を檀紀四三二六年だと言うが、この度、壇君の遺骨を掘り出して算出したよりも年代が短いです。今年を檀紀四三二六年というが、確かな証拠はないです。私たちが壇君陵をしっかりと建てておけば大倭教人たちが平壤へ来て壇君陵を見て喜ぶでしょう。²⁸⁾

金日成はキリスト教に関して南北交流を語ったのではないが、晩年には宗教に関する南北交流については柔軟な態度は見せ始めていたといえる。しかも、この時にはすでにキリスト教の交流は始まっていた。キリスト教は南北交流を通じて、徐々に北側への影響を及ぼすことができる余地があると考えられる。そのため、北側でキリスト教を基盤とした宗教的ナショナリズムが台頭する可能性を模索しながら、統一のために南北交流で役割を果たすことが南側のキリスト教徒にとって重要であると考えられよう。

結語

北東アジアにおける国家形成が未完成であることは、この地域の平和を不安定にさせる重要な要因の一つである。しかし、国家形成が未完成であることは、世界的にはそれほど認識されているわけではない。それが投資を呼び込み、北東アジアの経済発展をもたらす要因の一つになったと考えられる。また、その経済発展に伴う社会変動は、人々の国家に対する認識に影響を与えており、今でも大韓民国や中華民国の国民における国家認識は変化しつつあるといえる。朝鮮民主主義人民共和国では、今のところ、大きな国家認識の変化は確認できないが、将来に経済発展などによって大きな社会変動を経験すれば、国家認識も変化していく可能性がある。

現在、国際社会では、世俗的で革命的なナショナリズムに代わって、宗教的ナショナリズムが台頭している。朝鮮民主主義人民共和国でも、もし既存のナショナリズムとして国家を形成してきた共産主義思想に対する失望が広がれば、排除されてきたキリスト教によって宗教的ナショナリズムが台頭する可能性がある。そうすれば、南北朝鮮の対立軸の一つとして金日成が認識していた「キリスト教対共産主義思想」が解消され、統一に向けて南北朝鮮の国民の意識が近

づき、統一の可能性が高まってくると考えられる。

ただし、朝鮮民主主義人民共和国ではキリスト教は反民族的と理解されている可能性がある。これはキリスト教を基盤とした宗教的ナショナリズムが台頭するには障害となりうる。そのため、すでに始まっているキリスト教徒を含む宗教学者の南北交流で役割を果たし、反民族的ではないとの印象を北側に与えていつて、キリスト教を基盤とした宗教的ナショナリズムが台頭する可能性を模索することが、南側のキリスト教徒にとって重要であると考えられよう。もし、朝鮮民主主義人民共和国で宗教的ナショナリズムが台頭して、朝鮮半島が統一されて国家形成が完成すれば、それは北東アジアの平和にも寄与するものと考えられよう。

注

- (1) 本稿は、二〇一〇年九月一三日から一四日にかけて韓国の長老会神学大学で開催された「東北アジアの平和のためのキリスト教の役割 (The Role of Christianity for Peace of Northeast Asia)」で発表した報告文を加筆・修正したものである。
- (2) G・イエリネク著、芦辺信喜、小林孝輔、和田英夫訳者代表『イエリネク・一般国家学』第二版四刷(学陽書房、一九八五年)三二二―三二五頁。
- (3) アントニー・D・スミス著、一條都子訳『選ばれた民——ナショナル・アイデンティティ、宗教、歴史』(青木書店、二〇〇七年)一六九頁。
- (4) 中華民国側ではモンゴル共和国を認めていないので、モンゴル共和国政府の実効支配領域も領土になっている。
- (5) 『東亜日報』一九七三年六月二三日。

- (6) 金日成「平壤市群衆大会で行った金日成同志の演説」『労働新聞』一九七三年六月二四日。
- (7) 日本では、他の北東アジア諸国で国家形成が未完成であることを認識する機会はあまりない。それが如実に表れるのが「Six Party Talks」の訳語である。日本の朝鮮半島研究者ですら、「Six Party Talks」の訳語として「六カ国協議 (Six Countries Talks)」という単語を使う人がいる。しかし、「Six Party Talks」は六つの国家による協議ではなく、六つの政府による会談である。さすがに、日本外務省では、「Six Party Talks」の訳語は「六者会合」であり、英語に近い訳となっているが、日本の一般社会では「六カ国協議」がまかり通っているのが現状である。
- (8) 「台湾民衆 台湾人／中国人認同趨勢分布 (一九九二～二〇一・〇六)」『選挙研究中心重要政治態度分布趨勢図』 <http://esc.ncnu.edu.tw/modules/inyd2/content/TaiwanChinesesID.htm> (二〇一一年八月二〇日アクセス)
- (9) 金戡翰「世代間政治的葛藤の理解 (세대간 정치적 갈등의 이해)」『韓国社会の新しい葛藤構造と国民統合——社会葛藤と政治統合—— (한국사회의 새로운 갈등구조와 국민통합—사회갈등과 정치통합—)』一〇一頁 (二〇〇六年一〇月二〇日) http://kwdir.re.kr/data/woseminar/%BB%E7%C8%B8%B0%A5%B5%E%BB%FA_%C1%A4%C4%A1%C5%EB%C7%D5.pdf (二〇一一年七月二八日アクセス)
- (10) たとえば、二〇〇〇年に実施された仏教系の社団法人である「良き友達 [좋은벗들]」の意識調査では、韓国人の八三・四%、北朝鮮亡命者の九八・九%が統一を望んだ (「良き友達南北韓住民統一意識設問調査結果 [좋은벗들 남북한주민 통일 의식 설문조사 결과]」『仏教フォーカス [불교포커스]』[二〇〇〇年五月三二日] <http://buddhapia.com/mem/hyundae/autonepaper/273/n-14.htm> [二〇一一年八月二〇日アクセス])。二〇一〇年に行われた国会外交通商統一委員会のキム・ヨンウ議員による調査によると、韓国人の七七・七%、北朝鮮亡命者の九一%が統一を望んだ (「報道資料」[二〇一〇年一〇月二二日] <http://www.ywkim.co.kr/swboard/download.php?no=3491> [二〇一一年八月二〇日アクセス])
- (11) 「二〇日に発表された朝鮮民主主義人民共和国国防委員会代弁人声明 (20일 발표된 조선민주주의인민공화국 국방위원회 대변인성명)」『労働新聞』二〇一〇年五月二二日。
- (12) ちなみに五月二四日に発表された李明博大統領の「対国民談話文」でも大韓民国政府の管轄地域として「我らの領海、領空、領土 (우리의 영해, 영공, 영토)」という表現が使われていた。李明博「対国民談話文」二〇一〇年五月二四日『靑瓦台大統領動靜 大統領演説』<http://www.president.go.kr> (二〇一一年八月六日アクセス)。

- (13) 小杉泰 「現代の宗教復興と国際政治」 日本国際政治学会編 『宗教と国際政治』 (日本国際政治学会、一九九九年) 一頁。
- (14) 中野毅 「宗教・民族・ナショナリズム——読み解くための基礎と問題の所在——」 中野毅、飯田剛史、山中弘 『宗教とナショナリズム』 (世界思想社、一九九七年) 五頁。
- (15) M・K・ユルゲンスマイヤー著、阿部美哉訳 『ナショナリズムの世俗性と宗教性』 (玉川大学出版部、一九九五年) 二二—三九頁。
- (16) ベネディクト・アンダーソン著、白石隆、白石さや訳 『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』 (リブプロット、一九八七年) 二四—二五頁。
- (17) スミス、前掲、三五頁。
- (18) 同上、一五—一六頁。
- (19) 金日成 「教育事業で社会主義教育学の原理を徹底的に具現することについて——全国教員大会で行った演説 (혁명교양, 계급교양에 이바지할 혁명적영화를 더 많이 만들자 조선로동당 중앙위원회 정치위원회 확대회의에서 한 연설) 一九七一年二月二七日」 『金日成全集』 第四八卷 (平壤、朝鮮労働党出版社、二〇〇三年) 七八頁。
- (20) 金日成 「(二つの朝鮮) 操作策動を叩き潰し、祖国を統一するための闘争をさらに力強く進めよう——総連従事者代表团と行った談話 (두개 조선) 조작책동을 짓무시고 조국을 통일하기 위한 투쟁을 더욱 힘있게 벌리자 총련일군대표단과 한담화) 一九七七年二月二二日」 『金日成全集』 第六五卷 (平壤、朝鮮労働党出版社、二〇〇六年) 四八九—四九〇頁。
- (21) 金日成 「朝鮮人民の民族の節日八・二五解放一五周年慶祝大会で行った報告 (조선인민의 민족적명절 8・15해방 15돛경축대회에서 한 보고) 一九六〇年八月一日」 『金日成著作集』 第一四卷 (平壤、朝鮮労働党出版社、一九八一年) 二二—六頁。
- (22) 金日成 「面、里 (洞)、人民委員会委員選挙を成果的に保障するために——北朝鮮民主主義民族統一戦線中央委員会第九次会議で行った結論 (면, 리 (동) 인민위원회 위원선거를 성과적으로 보장하기 위하여 북조선민주주의민족통일 전선 중앙위원회 제9차회의에서 한 결론) 一九四七年一月一日」 『金日成著作集』 第三卷 (平壤、朝鮮労働党出版社、一九七九年) 一五—一六頁。
- (23) 金日成 「革命教養、階級教養に従事する革命的映画をさらに多く作ろう——朝鮮労働党中央委員会政治委員会拡大会議で行った演説 (교육사업에서 사회주의 교육학의 원리를 철저히 구현할데 대하여 전국교원대회에서 한 연설) 一九六四年一二

月八日』『金日成全集』第三卷(平壤、朝鮮労働党出版社、二〇〇〇年) 四二一—四二二頁。

(24) 金正日 「芸術映画《崔鶴新一家》を反米教養に貢献する名作で完成することについて——文学芸術部門従事者及び創作家らと行った談話(예술영화《최학신의 일가》를 반미 교양에 이바지하는 명작으로 완성할데 대하여 문학예술부문 일꾼 및 창작가들과 한 담화) 一九六六年一月二七日」『金正日選集』第一卷(平壤、朝鮮労働党出版社、一九九二年) 一八一頁。

(25) 同上。

(26) 金日成 「在米朝鮮人たちが団合して祖国統一運動を力強く推進することについて——在米朝鮮人たちと行った談話(재미교포들이 단합하여 조국통일 운동을 힘있게 벌일데 대하여 재미교포들과 한 담화) 一九九三年三月一日」『金日成著作集』四四卷(平壤、朝鮮労働党出版社、一九九六年) 一三四頁。

(27) 「団体はプロジェクト事業、個教会は宣教資源動員を——九八年以降北韓訪問毎年増加(단체는 프로젝트 사업, 개교회는 선교자원 동원을 98년 이후 부한 방문 해마다 증가)」『教会連合新聞(교회연합신문)』 <http://www.ecumenicalpress.co.kr/article.html?no=39602> (二〇一一年八月二八日アクセス)。

(28) 金日成 「壇君陵改建の方針について——壇君陵改建部門従事者協議会で行った演説(단군릉개건방향에 대하여 단군릉개건관계부문 일군협의회에서 한 연설) 一九九三年一〇月二〇日」『金日成著作集』第四四卷(平壤、朝鮮労働党出版社、一九九六年) 二六七—二六八頁。